

監修

新村出
山岸德平

高木市之助
小島吉雄

久松潛一

俳諧七部集

上

萩原蘿月校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

萩原蘿月（はぎはらげつ）

明治十七年東京生。昭和三十六年歿。東京大學國文學科卒業。明治學院、慶應大學、二松學舍大學教授等を歴任。主著―芭蕉の全貌、俳諧文學論、感動律俳句の理論と作品等。

日本古典全書

「俳諧七部集」上 萩原蘿月校註

昭和二十五年一月十五月初版發行

昭和四十一年三月二十日第七版發行

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

北九州市小倉砂津・名古屋市中

區廣小路）

定價 四二〇圓

目次

解説

一、七部集の流行歟……………	三
二、七部集の成立（刊行）年代と編者……………	三
三、芭蕉の變風と七部の書……………	四
四、七部集の内容に就いて……………	六
五、七部集の版本に就いて……………	三
六、七部集の校本に就いて……………	六
七、七部集の註本に就いて……………	六
八、原本の用字訂正に就いて……………	四

凡例

例……………	六
--------	---

本文

冬の日……………六

春の日……………八

曠野……………一〇

序……………一〇

目録……………一二

卷一……………一二

卷二……………一三

卷三……………一四

卷四……………一五

卷五……………一六

卷六……………一七

卷七……………一八

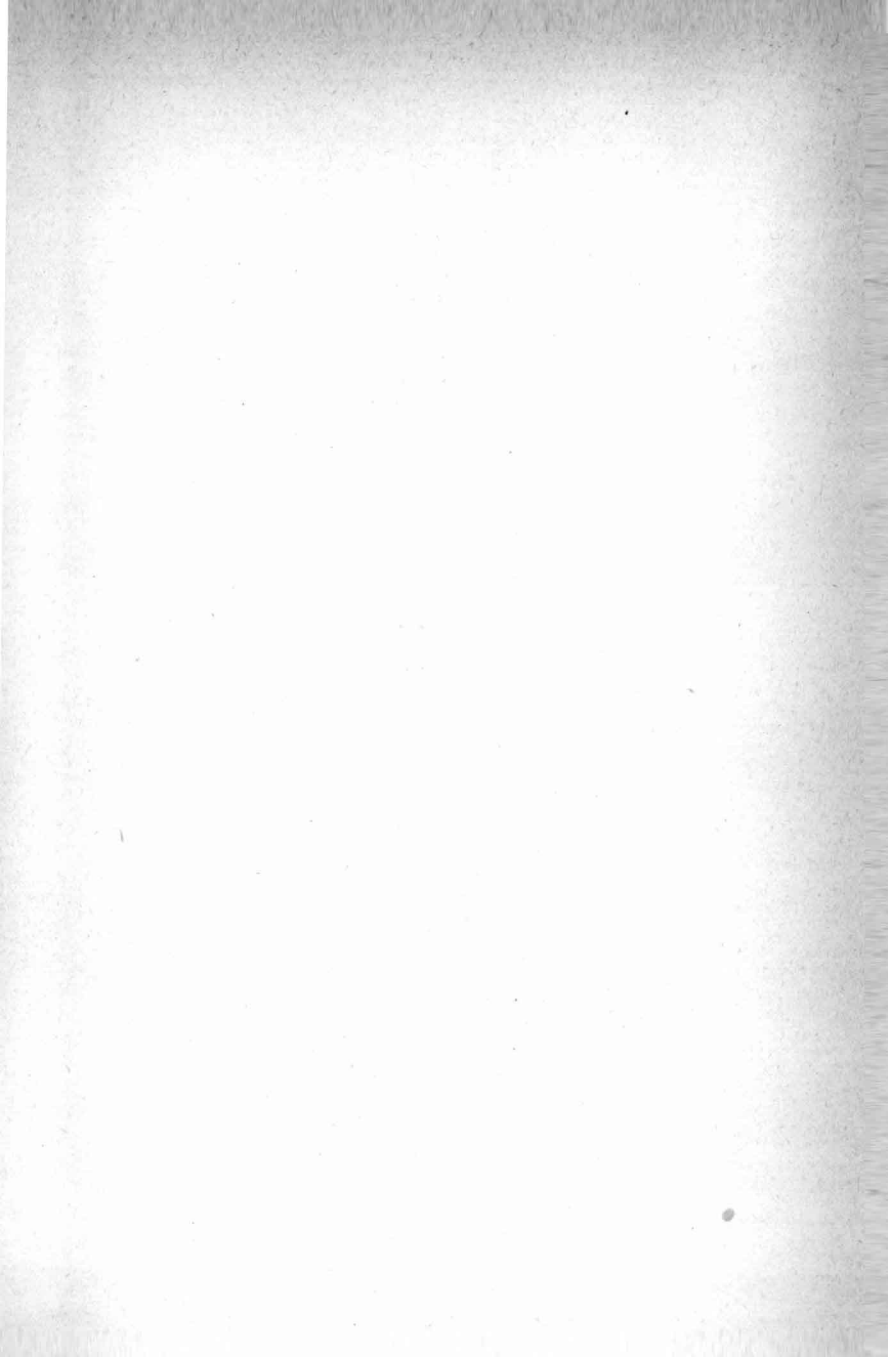
卷八……………二〇

員外……………二六

俳諧七部集

上

萩原蘿月



解 說

一、七部集の流行熱

元祿の遠い昔から、明治の新派俳句勃興に至るまで、およそ二百年間の俳壇を支配して來た撰集は俳諧七部集であつた。七部集は芭蕉一代の主要な撰集を七部集めたもので、もとくし神道五部書、或は禪家の四部錄、または醫家七部などの例にならつて出版されたものらしく、蕉門俳諧を學ぶ者の、簡単に芭蕉一代の變風を知り得られる所から、一般に尊ばれ流行したものであつた。貞徳の三部書、即ち御傘・淀川・油糟といつても、その尊崇は貞門系の俳人間に限られ、その流行に統一性を持たなかつたが、七部集はさうでなく、その感化は元祿の俳壇を出でて、二百年後の明治にまで及んでゐた。

芭蕉の俳諧は延寶・天和の頃はまだ談林の道化・輕口の調を離れなかつた。その調の脱出は貞享初年であつた。古哲みな「冬の日」の俳諧を正風の基礎とすることは當然のことであつた。これら七部の書は芭蕉の指導になつたもので、たとひ撰者は門人であつたにせよ、芭蕉の諒解を得て上木されたものであつたから、自然他の撰集と異つた態度で見られてゐた。許六などは芭蕉に入門しないところから、「曠野」「ひさ

と「猿蓑」を日夜忘れる間なく玩味したといふし、去來も「冬の日」「猿蓑」「炭俵」を芭蕉一代の變風を代表すべき集と考へ、支考も七部集の編者ではなからうかと疑はれるほど、七部の變風について詳論があつた。しかし、これらの俳人は元來芭蕉生涯の俳諧を研究するのが目的で、研究は七部の書に限られてはゐなかつた。たとへば、許六は「歷代滑稽傳」に、芭蕉の撰集として「延寶二十歌仙」「初懷紙」以下すべて十一部の集をあげ、去來は許六に答へた文中で「次韻」「虛栗」「冬の日」以下すべて五部の集を數へてゐた。支考に至つて撰集を「冬の日」以下五六の書に限つてしまつたが、これは劃期的撰集を特に示したもので、これ以外に撰集を讀まなくともよいといふ意味ではなかつた。したがつて、七部の書の研究もその發句・附句の部分的研究はあつても、七部としてまとまつた書の研究ではなかつた。もつとも、この時代はまだ七部集の内容が定まつてゐなかつたからでもあらう。

芭蕉は元祿七年に歿した。芭蕉歿後、寶永から寶曆までの間は、寶永に其角の「洒落風」正徳に不角の「化鳥」享保に「五色墨」延享に「江戸二十歌仙」などの動搖はあつたが、大體に醇正な蕉風の衰へた時代と見てよいが、七部集の尊重は依然として變らなかつた。柳居は「高軒」(享保十九年刊)の序に「冬の日」より「續猿蓑」まで七部の書を上げ、自己の年ごろ愛する書とし、淡々は「猿蓑」「炭俵」を一日見ないと、眼に霞がかゝつたやうだといつた。二世雪中庵吏登は、寛保二年の春七部集を草庵で講じ、三世雪中庵蓼太は、その口述を吏登の七回忌すなはち寶曆十一年六月に梓行した。蓼太は七部集の有名な崇拜家・研究

家であつた。彼は「雪おろし」(寶曆元年)の巻初に、芭蕉の風雅の變化を「冬の日」「春の日」「曠野」「ひさご」「猿蓑」などの集で代表させ、門人に「冬の日」「猿蓑」「炭俵」の三部を芭蕉第一の集であると物語つた。また門人鼠腹の亭で、運座後俳諧に關する質疑に應じて、「猿蓑」「曠野」「冬の日」を講じてゐる。芭蕉の變風を冬・猿・炭の三部で代表させることは初代嵐雪の唱へるところ、吏登これを承け、蓼太もこれに従つたのである。なほ明和七年加賀の加興「俳諧本來道」を著し、内に蕉翁七部書の辯において、詳しく七部集について論じてゐる。

安永・天明に至り、俳諧は新しい活天地に入つた。伊勢の樗良、加賀の麥水・闌更、大阪の蕪村、江戸の白雄しやう、秋田の五明、播磨の青蘿等の諸哲を迎へた俳壇は、從來の俗調を打破して一生面を展いた。彼等は新風の開拓者であるとともに、蕉風の研究家でもあつた。七部集の研究もこの期に入つて大いに見えるべきものがあつた。第一に注目すべきは註本の出版であつた。その主なるものをいへば、蓼太の「七部搜」杜勤の「猿蓑爪じるし」三駱の「七部抄」杜哉の「俳諧古集の辯」闌更の「冬の日解」素綾の「七部小槌」升六の「冬の日註解」などがあつた。次には七部集の翻刻と主なる宗匠の撰集七部を集めて刊行することである。前者は小本七部集の再刻、後者は「其角七部集」(天明七年刊、虛栗集・續虛栗・新山家・たれか家・萩の露・花摘・錦繡綴)がこの種の諸本の先鞭をつけ、次に「樗良七部集」(寛政五年刊、我が庵・村雨笛・月の夜・石をあるじ・としの尾・菊の香・花七日)が出た。この期の研究は、曉臺が「冬の日」「熱田三歌仙」の調を鼓

吹し、麥水が蕪村一派の應援を得て、虛栗調を復活し、蕪村が「初懷紙」の附句を稱揚したことが注目された。

復古蕉風の主なる俳人は、享保初年までに大方歿してしまつたが、その門人は各師の衣鉢を傳へて新風を維持してゐた。文化・文政の俳壇は天明期の如き絢爛たる光彩を放つてゐないが、また別趣の風格を備へてゐた。この時代の七部集熟もまた盛であつた。主なる註書には曰人の「炭俵註」宜麥の「續繪歌仙」何丸の「七部集大鏡」公石の「續猿蓑註解」などがあつた。元祿蕉門の撰集や、當時流行の宗匠の撰集をまとめたものには、「俳諧七部拾遺」(享和二年刊、初懷紙・野ざらし・三歌仙・一つ橋・桃の實・初便・其袋集)「續七部集」(享和三年刊、深川集・卯辰集・韵塞・刀奈美山・有磯海・小文庫・千鳥掛)「西國七部集」(文化五年刊、野梅・鳴戸海松・夜寒・雪づくし・ひと鯛・ひなた路・蓬路)「蕪村七部集」(文化六年刊、其雪影・明鳥・一夜四歌仙・桃李・續明鳥・五車反故・花鳥篇。なほ同書の奥附に、蕪村七部集後編、春夜樓若夢とあるが、出版されなかつたものらしい)「士朗七部集」(文化八年刊、草枕・松の炭・昔合集・橋日記・ふくべ日記・三日月集・菴犬集)「枇杷園七部集」(士朗の七部集で、文化十一年刊か。麻刈・葦の眼・法華華經・三日月集・瓢日記・菴の大・枇杷園隨筆)「芭蕉七書」(文化十二年刊、行脚掟・二十五ヶ條・十六篇・句合・嵯峨日記・奥細道・芭蕉發句集。本書には享和元年刊蕉門七書といふ類本があつた。上下二冊で、佐野石兮の序及び附言があるが、芭蕉七書は三冊で、蕉門七書の下巻なる蓼太軒の芭蕉附合集を削り去つて、芭蕉發句集を収めてゐる。おそらく芭蕉七書は蕉門七書の改刻で、蕉門七書の解題・附言

を訂正し、内容を改めたものであらう。「流行七部集」(文政三年刊、新蛙合・雪わり・鮎波・炭瓢・鼠道行・長月集・月見ノ記・斧の柄・附録三十六家詠)「士朗續七部集」(文政七年刊、三富士合・續草枕・をながどり・東西四歌仙・ぬき買・秋の日三歌仙・枇杷の實)「枇杷園七部集」(文政八年序、文化本の枇杷園七部集と異り、五編三十五部採録。初編、飲中八歌仙・浦島・山吹集・鳶の眼集・麻刈集・口笛集・留守懷紙。二編、橋日記・文化五歌仙・於本尊・玉笈集・花橘・ふくべ日記・落梅花。三編、松の炭・飛波婦久呂・松の硯・玉くしげ集・三日月集・名なし鳥・木瓜つゝじ。四編、法法華經黃鸝品・草枕・菴の犬・人來鳥・藁つと集・閑古鳥・名なし草。五編、長壽樂・きねうた・糞虫集・泣瓢集・玉兎集・臘夜・柴の戸集)「士朗五七集」(前者の後刷本といはれるが、採録の順序を異にする)「俳諧七部餘錄」(一名新七部集、文政十一年刊。田舎の句合・常盤屋の句合・續ヶ原・武藏曲・別座敷・雪丸げ・桃の白實)「月居七部集」(同年刊、宵の古道・日ぐらし・反古合・山水行・二十日月・立枝・河千鳥)「枯魚七部集」(同年刊、吳竹・月見草)「曉臺七部集」(文政十二年刊、豎並集・爪じるし・幣袋・佐渡日記・しをり萩・秋の日・夜の柱)「道彦七部集」(文政十三年刊、鳶の眼・そごろ言・澁四手・鶴芝集・馬の上・黒ねぎ・畑芹附録)などが出た。

この期の七部研究には、成美の「隨齋語話」(文政二年刊)中に、「冬の日」「猿蓑」「曠野」の句についての考證が見え、木阿彌は「俳諧饞舌録」(文化元年刊)に、切字・係り結び・天爾波、命令形などについて七部集の發句を引用し、富士谷成元は「俳諧手爾波抄」(文化四年刊)に、七部集より例句をあげて説明し(天明七年刊無腸の「也哉鈔」も見逃がしてはならぬ研究であつた)、月居は「俳諧道の便」(文化五年刊)に、七部集の句

を二十六箇所にわたつて附け方の則るべきを示し、そのうへ註解を施し、篤老の「芭蕉翁附合評註」(文化十二年刊)にも七部集の附句百四十六を註してゐる。その他鶯笠・無味堂・太節・風谷・五芳・芝山等の説も大鏡中に見える。

以上の如くこの時代は七部集の出版流行を極め、後人に多大の便宜を與へたけれども、この種の翻刻本は頗る杜撰で、寫誤・假名違ひ・脱字などが多いばかりでなく、古集の序跋を勝手に除去し、開板年月、版元の名を削り去つて、これを以て古集の研究に資すべく、全く危険と不自由を感じしめてならない。おそらくこれらの覆刻本は、七部集の流行につれて、書肆が營利の目的より、未練の俳人に校合させたものかと考へる。

化政度の新風を維持して來た成美・乙二・士朗・道彦・完來・月居の徒は、大方文政の末年までに歿してしまひ、俳壇の機運はこゝにまた一轉化した。天保以降の俳壇は梅室・蒼虬・鳳朗・一具・護物・梅通・見外・爲山・幹雄・西馬・蓬宇・永機・雀志等、いはゆる月並宗匠の占領する所となつてから、日一日と低趣味に俗化したが、七部集は未曾有の權威を持つやうになつた。

まづ註本では、曰人の「七部礫^{つらと}」成美の「七部集纂攷」(成美の註にはその他七部集校正・標註七部集などがあつた)何丸の「七部小鏡」寄三の「七部集連句早見」錦江の「俳諧七部通旨」曲齋の「七部婆心錄」樺柯の「猿蓑逆志抄」西馬^{さいば}の「標注七部集」保考の「七部集打聽」一叟の「俳諧七部集十寸鏡^{すす}」指直の「俳

諸猿蓑註解」波鷗の「七部集講義」碌々の「俳諧炭俵註解」などがあつた。

七部叢書には、「乙二七部集」(天保六年刊、斧の柄・わが佛・耳さらへ・箱館紀行・蕪村句解・手爾波草・松窓句集續篇・附録今人句集)「護物七部集」(「更科七部集」(天保七年刊、旅手綱・月の照・御湯遊び・續御湯遊び・信濃富士・きの子狩・時雨會)「俳諧今七部集」(天保八年刊、利根太郎・一二三・いぶり炭・栗柿・臘夜・すゝき・落穂)「禾葉七部集」(勝鹿早稻・藁笠・藁盒子・續藁盒子・福藁・藁菰・藁履)その他「芭蕉翁俳諧四部錄」(可般圖・四季句合・野晒紀行・嵯峨日記。菊舎の目錄には未刻二冊とあつて、刊本とその内容を異にしてゐる)「雪門七部集」(新夏引集・去嫌眞砂歌・住吉千句・墨水兩岸行・百羽搔・武藏三歌仙・秋の夜)「同拾遺」(三春日紀・筑波紀行・江の島・秋山家・再興集・髭箒・一夏百歩・藤衣)奇淵輯の「俳諧四部集」(山かげ集・あやめ根合・萍日記・玉箒)などがあつた。なほ曲齋編の「支考七部集」(古今抄・十論爲辨抄・本朝文鑑・和漢文藻・つれづれ・讚・新撰大和詞)或は「獅子百韻七部集」(新百韻・夜話狂・三足猿・後山伏・南無俳諧・東山墨直・八夕暮)「涼菟七部集」(行脚辰・皮籠^{かわど}摺・一幅半・山中集・潮とろみ・七五月雨・鰯俵)などは廣告ばかりで出版されなかつた。

七部集の研究には、梅室の「梅林茶談」(天保十三年刊)中に、芭蕉の俳諧の法則に拘泥しなかつた例を七部集の附句について論證し、北元の「古學臺叢抄」(天保五年刊)には七部集の切字について説明があり、「舍利風語」(弘化二年刊)中の麥慰舍隨筆には七部集に當てはめた時代の俳風論が見え、卓朗の「俳諧道の杖」(文久三年)には七部集に關する考證などがあつた。そのほか、梅室の俳諧を難じた天來の「俳諧七草」(天

保十一年刊)及びそれに關する難陳の「はなればし霧々志」俳諧春の田」なども參考とならう。

この時代の特筆すべきことは七部集の定本製作であつた。前時代の研究は附合・發句の註解、或は附方論が一般で、七部集の校合とか定本とかいふ點までは進んでゐなかつた。それは前時代にはまだ信すべき七部集の古版本が残つてゐたからであらうが、天保以降古版本も大方散逸し、流布の印本信じがたきもの多く、七部集を斯道の金科玉條と仰ぐには、どうしても校合を嚴重にした七部集を要することとなつて來た。この種の校合本のうち西馬の「標注七部集」が最も信ぜらるべきものであらう。曲齋の婆心録も校正によほど注意したやうであるが、獨斷多く、信すべくして信じられぬ書である。

天保以降七部集の尊崇は極點に達した。以前より七部集は尊ばれてゐたが、まだ七部の書に捉はれるほどではなかつた。然るに、この時代になると、七部集は俳人の聖典のやうな觀を呈した。天來の攻撃は梅室の俳諧に對してであつたが、その攻撃の目的よりもむしろ當時の俳壇の裏面の消息を喝破した點において、より多くの興味を感じる。七草の卷頭にいふ「蕉門の徒連歌より出でたる俳諧の式目を學ばずして、末書の杜撰なるものを信じ、殊に七部集などを釋迦の經典の如く思ふより、かやうの異端起れり。……たゞ七部の郭中に遊ぶの御身、猿蓑の猿智恵を振ひ、……その廣き胸に、わづか七部集及び貞享・元祿の集のみなるは、大倉の一粟なり。……かく申すとも和歌・俳連蕋奥の書を熟讀せざる七部先生にては、その理合點參るまじ。……憐むべし、老人は七部の井蛙なり。云々」。これに對して梅室の返答は「さてこの

論者は芭蕉門の大集は聊かも讀まれぬと見ゆ。その證據は手本の七部集にさへある事をことごとくしく論ず。……七部集さへ讀まざる人を相手には老人大人氣なし。依つて閉口。云々」とある。七部集を蕉門の大集と考へ、七部集を讀まぬ人を俳人でないかのやうに考へてゐる點は注目すべきである。天來にかくまで痛罵されても、依然として例句を他の撰集より求めず、専ら七部集より求めてゐるやうでは、七部先生とか七部集の井蛙とか罵られても仕方あるまい。

蒼虬門の花の本梅通は「麥慰舍隨筆」に、天明以來の風調を七部の時代に配當し、「天明・寛政・文化・文政を経て、曠野・猿蓑・炭俵をうつし來る。さあれ安永に冬の日をうつせど、眞の冬の日にならず。文化に猿蓑を撰すといへど、更に猿蓑に等しからず。天保に炭俵を覘ふといへども、炭俵に等しからず。云々」と論じてゐるが、これらは蕉風復古の理由を解しない論である。安永に冬の日をうつすとは、曉臺一派の運動を指したのだらうが、當時の中興俳人は冬の日ばかりを目標とせず、蕪村は初懷紙、麥水は虛栗といったやうに、各自の準據を異にしてゐる。文化に猿蓑を學ぶといふのもわからぬことで、乙二が去來の風調を好んだといふことは「斧の柄」の跋に見えてゐるが、一般にさうかどうかは疑問である。化政度の成美・道彦・士朗らの俳諧をとつて考へても、全體に猿蓑の寂桀とは性質が違ふ。これは梅通が七部集に囚はれた結果、むやみに時代の新風を七部集を本にして論じたがる癖念であらう。五明がかつて門人の問に答へていふに、炭俵は草の調で眞似易いが、この調は蕉門で最も危い所であるといつたが、それは形

式的模倣を戒めた言であつた。梅室・蒼虬の徒は皮相の模倣をこととしたから、みな俗調に墮ちてしまつた。幹雄は見識のある方だらうが、標注七部の凡例に、「七部集は俳諧第一の尊き文なれば、云々」といつて、理窟つばい俗な境地に入つてしまつた。以上の事情に徴しても、天保以降の俳人がどれほど七部集を有難がり、どれほど七部の小天地に踞踏したかがわからうと思ふ。

二、七部集の成立(刊行)年代と編者

芭蕉の生前七部の書は單行本として刊行されたが、その成立・刊行年代及び編者については古來一般に詳らかでなかつた。例へば、素綾の「七部小植」(寛政七年)の序詞に、「何れの時何れの人か七部集と名づけるやらん知らず、云々」などとあつて、刊年も編者も不明であつた。たゞ新七部集の醉室其成の序に、「ここに元祿の頃の集どもを集めて七部集と名づくる事は支考の仕業なる由、云々」とあつて、編者は支考だらうと傳へてゐた。これについて志田素琴氏は柳居(前、麥阿)の「高軒」(享保十九年刊)の序、「こゝに年比我が愛する枕あり。いはゆる冬の日・春の日・ひさご・あら野・炭俵及び前後の猿蓑、この七部の書合せて十二冊、云々」とある文を引用し、享保十九年以前に七部集の編成のあつたことを示し、柳居は乙由の門人で、しかも享保時代は乙由の伊勢派と支考の美濃派との交渉が深かつた時代であるから、七部集の